NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 9

2004. 10. 1

※

・事務局長より「企業へのご提案を考えてみました」
・報告－都留市博物館「ミュージアム都留」収蔵品史料整理事業
・保存修復の現場から「こだわりの道具紹介②－ハロゲン光源装置－」
・ワーキンググループが発足しました
・ＪＣＰ事務局通信

企業へのご提案を考えてみました

㈱○×△　御中

拝啓
貴社のご繁栄と貴殿のご健勝を心よりお祈り申し上げます。
さて、新しいプロジェクトのご提案をさせて頂きます。

・「○×△国際文化基金」を新設、宣伝・広告費から年間（一定額）円を拠出していただく。
・ＮＰＯ文化財保存支援機構と提携し、一企業による初の文化財クリニック活動を全国規模のプロジェクトとして展開していく。
・国際舞台にも対象を広げ、貴社の国内・国際社会貢献イメージを「文化財クリニックの○×△」として構築、定着を図る。

国宝、重要文化財は、文化庁の予算で毎年順次、指定の工房で修復がなされています。
一方、日本は全国各地に固有の重層な文化が培われ、地方色豊かな文化財が博物館、美術館、資料館、寺社、所蔵家の収蔵するところとなっています。しかしその多くは未指定文化財で、日本民族の重要な文化遺産でありながら、保存修復が行き届かず、言わば肺炎にかかったり、重傷が年を経るごとにひどくなっているのが実態です。

文化財の保存修復に専門で取り組んでいる日本で唯一のＮＰＯ文化財保存支援機構と提携し、未指定の重要な文化財、歴史民俗資料、生活文化財を対象に、困りごと相談、実態調査、コンサルティング、臨床医紹介、ワークショップ開催、巡回診療、応急処置、臨床医を選定しての修復を実施します。
一方、災害時の文化財レスキューや、国際的には国境なき文化財修復集団として、いずれ活動の舞台を広げてまいります。

全国の事業現場、関連文書には、貴社のロゴマークを常に明示させて頂きます。参加者や見学者には、ロゴマーク入りのＴシャツやウインドブレーカーなども提供していきます。メディア広告にも貴社の社会貢献活動として「○×△は文化財クリニック・プロジェクトを推進しています。」と明記していただけます。
以上、ご高配の上、日本文化の歴史的な担い手として、ご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げる次第です。

敬具

特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
事務局長　　谷　久光

※ミュージアム都留所蔵　八朔祭り緞帳（下絵：葛飾北斎）

報告

都留市博物館「ミュージアム都留」

収蔵資料整理事業（山梨県緊急地域雇用創出特別基金事業）

平成15年度下半期において、ＮＰＯ文化財保存支援機構は、山梨県都留市博物館「ミュージアム都留」から委託を受け、収蔵資料の整理に取り組むことになりました。

ミュージアム都留は平成11年に設立され、古文書11,000点をはじめとして、その他民俗資料、美術工芸品、絵画など合わせて約400点が収蔵されています。しかしそれらのデータはまだ完全にデジタル化されておらず、整理や検索に時間がかかるといった現状がありました。今回ミュージアム都留は山梨県緊急地域雇用創出特別基金事業の補助金を受けるに際し、収蔵品を調査して既存の目録との照合を行い、コンピュータに打ち込み、保管の基本となるデータシートを作成することを目指しました。

ミュージアム都留全景

史料の分類整理は、高度な専門知識を必要とする重要な作業です。しかし補助金の性格上、専門知識を持たない地元の人を４名雇用しなければなりませんでした。そこで、学習院大学大学院院生であり、甲州史料調査会にも所属している史料調査の専門家、西村慎太郎氏に全体の指揮をお願いすることになりました。地元雇用者の４名には、基本的に既存の目録をコンピュータに打ち込む作業をしてもらい、収蔵庫の調査は西村氏と後輩の吉成香澄さん、そして甲州史料調査会の面々がボランティアで手伝ってくれました。そのような時には4名の地元雇用者にも収蔵庫に入ってもらい、専門家の指導のもと、実際に古文書に触れる機会も作りました。郷土の歴史を目の当たりにして、皆大変興味をそそられたようです。作業は思いの外早いペースで進みました。

以下、西村慎太郎氏に事業の内容を報告して頂きます。

ミュージアム都留 収蔵文書群調査プロジェクト 成果報告

西村　慎太郎（学習院大学大学院）

本プロジェクトは山梨県都留市博物館ミュージアム都留（以下、当館と略す）に収蔵されている諸文書群及び都留市史編纂段階で作成された目録類の現況を把握することを目的とし2003年10月から2004年3月まで作業を開始した。

当館における古文書関係の諸資料は３つに大別できる。①収蔵古文書、②市史編纂段階で作成された目録類、③市史編纂段階で作成された古文書のコピー類。そこで今回はこれらを総合的に把握し、円滑な保存管理システム構築を行うこととし、未整理文書の保存・整理・調査に関する前提作業を展開した。

具体的な作業過程とこのプロジェクトによって生み出された成果を２点にわけて述べてみたい。

1. デジタルアーカイブス化に当たっての前提作業

当館は歴史系博物館として、多くの文化財を保存している。それらを展示・研究・教育に利用するため、将来的にはウェブ上での閲覧が可能になれば、その効果は計り知れない。そのためには既に市史編纂段階で作成された目録のデータ入力が不可欠である。また、本館は旧役場文書を多く収蔵しており、アーカイブス的役割も期待される。そこで、手始めに市史編纂段階に作成された目録の入力作業を行った。たいへん膨大であるため、作業は困難であったが、全体の75パーセント程度が終了した。それらのデータは全てExcel に保存した。今後の活用が期待される。また、当館２Ｆ図書保管庫内の目録配架状況を確認し、配架表を作成した。これまで配架されている目録に関しては十分な利用ができなかったが、この作業によって目録の効率的な利用が可能となった。

2. 未整理文書の析出

市史編纂段階で、非常に詳細な目録が作成されたが、まだなお、未整理文書が多く残されている。それらを目録化

収蔵庫内　配架の様子

する必要があるが、現段階では収蔵史料中、どの程度の未整理があるか判断できず、未整理文書の析出→細目録作成のためのプログラム作成という手順が不可欠であった。そこで、概要調査を実施し、全体像を把握するためのデータシートを作成した。概要調査は収蔵庫に収められている文書保存箱ごとに、①何が収められているか、②保存箱に記されているデータ通りものが収められているか、③劣化状況の検証を行った。この作業に関しては学習院大学大学院の吉成香澄氏をはじめ、学習院大学・駿河台大学・法政大学の大学院生も作業に参加した。析出された未整理文書については、今後山梨を中心に史料保存活動を実施している甲州史料調査会によって整理されることとなり、5月1日～

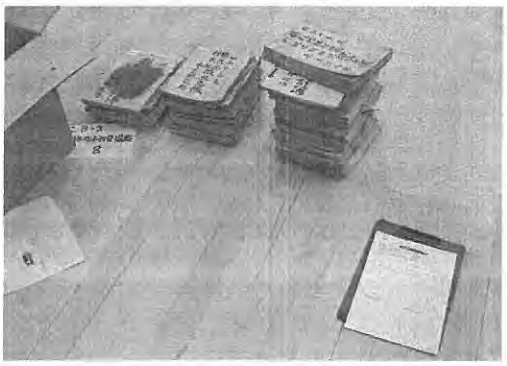
調査記録用紙

3日にかけて20名ほどで調査が行われた。調査の詳細については、甲州史料調査会会報『桃太郎』30号（2004年10月発行予定）を参照されたい。

今回のプロジェクトによって、当館の史料を保存管理するシステムが構築され、未整理文書の整理プログラムも作成することができた。当館にとって、今回の作業は計り知れない成果であったものと自負している。

最後になりましたが、ご指導頂きました都留教育委員会の牛田弘長様、ミュージアム都留学芸員の杉本悠樹様他都留市及びミュージアム都留の皆様に熱く御礼申し上げます。

作業の様子



三浦加代子さん
（南都留郡西桂町在住）
今回の事業に参加して、歴史に興味がもてました。収蔵庫で実物の古文書を目の前にして、歴史に触れられた思いがしました。

仁科邦彦さん
（都留市上谷在住）
地元の歴史に触れて感激しています。貴重な経験を積むことができてよかったです。

前田文子さん
（都留市桂町在住）
偶然にも共通点の多い仲間に恵まれ、データ入力という地道な作業にも拘らず、楽しくアットホームな雰囲気で作業を続けることができました。都留の歴史の一端に触れられたのも貴重な経験です。どうもありがとうございました。

小林希さん
（南都留郡西桂町在住）
この仕事でそれぞれの時代に生きた人々の考えや生活を垣間見て、文字の上でしか感じる事が出来なかった歴史の中の世界が現実のものだとより身近になりました。まるで絵本の中から人や馬が飛び出して来たような、そんな興奮を覚えました。ありがとうございました。

吉成香澄氏

○西村慎太郎さんプロフィール

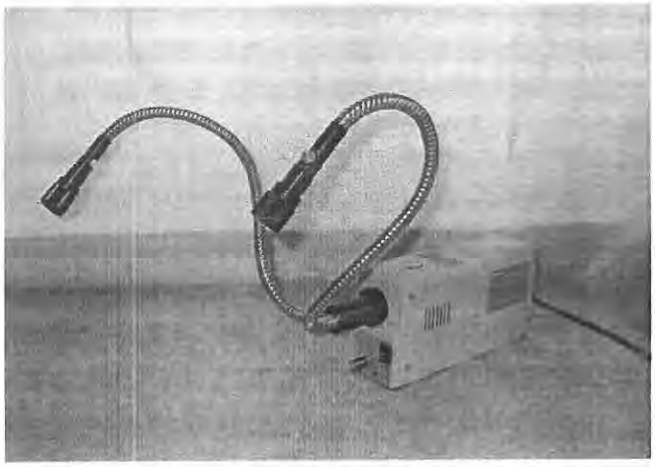
- 1974年　東京都生まれ
- 1999年　学習院大学文学部史学科卒業
- 2001年　学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程修了
- 2004年　学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程修了
- 現在　学習院大学文学部史学科助手

保存修復の現場から

「こだわりの道具紹介②ーハロゲン光源装置ー」 (三浦功美子)

修復の作業を行っているときの照明の明るさは、大事な要素の一つである。作業内容によって、照明の方法や強さなどもいろいろと変わってくる。部屋の明かりで十分のときもあれば、処置をしている箇所を明るく照らしてほしいとき、作品を透過するときの照明などなど。それぞれより良い修復を行うために工夫をしていると思う。

最近、私は作品の画面上の細かい処置をするときに、ハロゲン光源装置を愛用している。



使用機器
林時計工業株式会社製
ハロゲン光源装置　LA-100USW (¥36,000)
ライトガイド　LGA2-5L500 (¥33,000)
集光レンズ　SHZ-1 (¥10,000)
(価格情報提供:株式会社 三啓 03-5805-0511)

ハロゲン光源装置は、名称で示すとおり高輝度のハロゲンランプを使用している。熱を伝えない光ファイバーのライトガイドというアームを装着して、ファイバーの先端から光を照射する照明装置である。ライトガイドの調節で、光を自在に動かし自由な位置にコントロールできるようになっている。光ファイバーは２重層になっており、その境界で光が反射しながら進むので、ある範囲の波長の光しか透過しない。照明用は可視光を透過するように設計されているので、それより波長の長い赤外線や波長の短い紫外線は透過しない。そのため作品にも光によるダメージを与えない。

ハロゲン光源装置は、主に画像処理機器用の照明、顕微鏡用、理科観察用、実験用などの照明として使用されている。ハロゲン光源装置本体の機能レベル、ライトガイドの素材や長さ、ライトガイドの先端部分のレンズの形状は、各器具にいろいろな種類がある。それぞれ選択し組み合わせて、自分の用途に合った照明装置が持てる。要するにイージーオーダーができる。

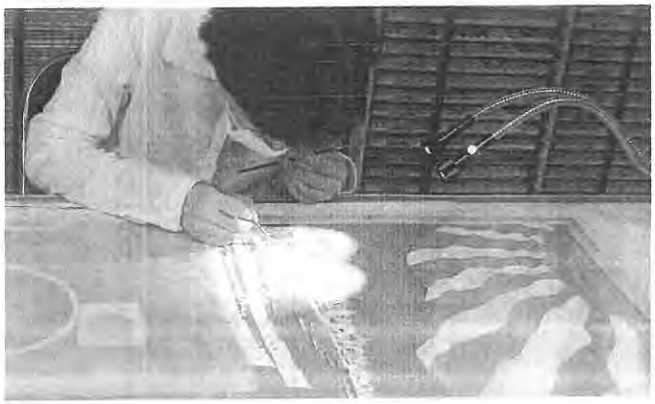
私が使っているタイプは、購入したメーカーの光源装置の中で一番コンパクトなものである。小型軽量で２kg。電源のスイッチと光量調整のコントロールが付いている(まだいろいろな機能が付いているのだが、私は今の所必要がないので使っていない)。本体のハロゲン光源装置に２つに分岐した50cmの長さのライトガイドを装着。このライトガイドは自由に動かし角度や距離の調整をして、その状態で固定できるタイプである。分岐型なので両方向から光を当てることができる。そのライトガイドの先端に集光レンズを付けて、照射される光をより明るくしている(写真参照)。

私が仕事をしている工房にはハロゲン光源装置があり、使ってみるとかなり明るいので作業がやり易かった。作品の表面上の調査、細かい処置などのときに使っている。

絵の材質、技法、損傷などの状態を調査するときに、画面の部分を照らしながら観察していく。斜光にすると、本紙の亀裂や折れ、絵具層の剥離などの損傷がはっきりと照らし出される。

修復処置である絵具層の剥落止めや画面上の虫糞などの付着物を除去を行うときに、手元部分をピンポイントで十分な明かりがほしい。このようなとき、処置する箇所を十分に照らしてくれて、画面に向かってライトガイドの角度や距離を手元で簡単に自由に調整することができる。さらに、コンパクトなので作業をする場所に気軽に持ち運びができる。特に出張時は道具などの荷物はなるべくコンパクトにしたいので、一番小型の装置を選んだ。

工房にはライトガイド、集光レンズが数種類あり、作業内容や各自によって使い分けている。例えば、美術館での作品のコンディションチェックを行ったときは長いホース状のライトガイドを使用している。懐中電灯よりも高輝度のハロゲン光源装置の方が明るく、作品の状態をチェックはやり易いと感じた。



昨年ＮＰＯ文化財支援機構の仕事でパイロットのポスター原画の応急処置を行った。所蔵場所であるパイロットの資料室に行き、現場で処置をした。このときにハロゲン光源装置を持って行った。絵具の剥離部分や本紙の糊離れ部分など作品の状態を細かく確認し、損傷箇所の処置を行い、再度処置後の確認をする。手元の近いところでライトガイドを自由に動かしながら、作品の状態が良く分かる照明の中で作業できて、とても重宝した。

ただし、作品全体のような広範囲を高輝度な状態で照らす照明装置ではない。手元ほどの範囲内で細かい部分の調査や作業を行うときに威力を発揮する。距離や光量にもよるが、私が使っているものは直径30cmくらいを十分に照らしてくれる。また、長時間使用していると、光ファイバーは熱を持たないので作品に負荷を懸けないことは良いのだが、装置本体はコンパクトサイズのため、内部のファンは廻ってはいるが熱くなるので、置く場所は注意が必要だ。

ハロゲン光源装置は、今回紹介したものだけでなく、いろいろなメーカーから出ており、それぞれ特性も違うので、他にも情報があれば教えて欲しい。

会員の声

日華資料センター主催の月例会は、去る８月21日（土）、「日本と台湾の文化財保存支援交流の現状」と題し、港区三田の日華資料センターに林煥盛氏を講師として招き、行われました。林煥盛氏は1963年台湾屏東生まれ。国立台湾大学文学部大学院中国美術史を専攻、修士を取得。1994年から京都の㈱宇佐美松鶴堂にて美術品修復を修業、現在東京国立博物館にて研修をしています。

参加者は20名ほど。関西方面からも多くの会員が来てくれました。

今回会員の声を寄せてくれたのは、高校3年生の会員　石橋由美子さんです。

日華資料センター月例会に参加して

一般会員　石橋　由美子

生まれた時から古い日本家屋に住んでいたからか、幼い頃から日本の寺社などの建造物が好きで、そこから文化財に興味がわき、今回も「文化財についてもっと知りたい……！」そう意気込んで参加させていただき、講師の林煥盛氏、また他の参加者の方々からも様々なお話しをお聞きすることができました。

台湾では文化財修復が文化政策として始まったのが1995年と、つい最近であったことや、1999年９月の台湾中部大地震が文化財修復において大きな転換点となったこと、また台湾では以前寺院の修復でペンキやコンクリートを使用していたこと等、初めてお聞きすることばかりで終始驚きと新鮮さを感じることができました。

“文化財”と聞くと、なぜか最初に自国である日本のことが頭に浮かびがちだった私は考え方が偏っていたなと改めて反省し、より大きな視野で物事をとらえて考えなければいけないと感じました。

台湾は英語名をFormosa（フォルモサ）といい、これはポルトガル語の“美しい島”に由来するそうです。まだ私は台湾を訪れたことがないのですが、いつか訪れてみたいと思います。

最後になりましたが、今回の月例会を企画してくださったＮＰＯ　ＪＣＰ、日華資料センターの皆様、とても勉強になりました。これからも出来る限り参加していきたいと思います。どうもありがとうございました。

日華資料センターにおける講演の様子

左、講師の林煥盛氏。右、国立故宮博物院科技室主任　岩素芬氏

ワーキンググループが発足しました

既にメールマガジンなどでも呼びかけてきましたが、このたびいくつかのワーキンググループが発足することになりました。当機構も設立より3年が経ち、会員層も多様になってくると同時に、社会から期待されることも多岐にわたってきています。そこで、従来の一元的な運営であったものをワーキンググループという形に分け、一層多様かつ活発な活動を展開していきたいと思っています。

まずは「倫理綱領作成」ワーキンググループです。文化財への医療行為を行う保存修復専門家にとって、職業倫理の問題は避けては通れないものとなっています。先進国では既に長い時間をかけて倫理綱領を練り上げています。保存修復界全体の倫理規程作成は、文化財保存修復学会会長をも務める三輪嘉六理事長にとって懸案のひとつではありますが、まずは当機構独自の綱領作りから始め、保存修復界全体の動きを促進できたらと思います。

また事業を企画推進するワーキンググループの第1号として、「東洋書画資料」ワーキンググループを立ち上げます。東洋書画資料は、このＮＰＯで最も会員層の厚い分野です。現在までに行ってきた敦煌や東博浮世絵のマウント支援なども、この分野の技術者が中心となって担ってきました。今後はこの中で問題提起や事業企画、さらには運営も推進していきます。「東洋書画資料」に関わる会員は是非このワーキンググループに参加してください。今後民俗文化財、工芸など、他分野のワーキンググループができれば、横のつながりを持ってより広範なニーズに答えられるようになるものと思います。

以下、これらワーキンググループの趣旨と今後の活動予定をお知らせいたします。会員の皆様の、積極的なご参加をお待ちしています。

倫理綱領ワーキンググループ（伊藤　宏 / 半田正博 / 松田泰典 / 三浦功美子 / 八木三香）

ＮＰＯ文化財保存支援機構　倫理綱領作成へ向けて

このたびＮＰＯ文化財保存支援機構では、倫理綱領ワーキンググループを立ち上げ、当機構独自の倫理綱領作成を目指すことにいたしました。

すでに3年の月日を経、ＪＣＰも社会のニーズに応え、多様な事業を展開してまいりましたが、活動が活発化すればするほど、技術者や保存専門家の理念の共有化を図る必要が生じています。

既に欧米では倫理規程の策定が進み、ＩＩＣカナダ※1、AIC※2、ICOM※3などが独自の倫理規程を作っています。日本でも1995年に文化財保存修復学会が取り組んだことをはじめとして、必要性の認識は徐々に高まりつつあります。しかし分野が違えば技術も違う中で、統一的な倫理観をあてはめることの難しさからか、具体的に文章化するまでにはなかなか至っていないのが現状です。それでも保存修復界の発展のためには、個々の倫理観を共通

ＮＰＯ文化財保存支援機構　倫理綱領作成の理由

本規程は以下の理由により作成するものである。

1）文化財の保存修復事業の発展をみている先進国のうち、倫理規程をもたない国は非常に少数となっている。

2）我が国においては、医師の倫理や弁護士倫理はもちろんのこと、新聞倫理綱領、雑誌編集倫理綱領、看護師の倫理規定、図書館員の倫理綱領、ソーシャルワーカーの倫理綱領など、社会的信頼を得ている業務においては、倫理規定類が制定され規範としての機能を果たしている。人類の文化遺産というべき文化財を扱うとき、その成否を個人の価値観に委ねるのは、あまりにリスクが大きい。

3）文化財の保存修復業界においても、公的機関を初めとする依頼主の側から、倫理規程に類する規定に関する問合わせが増加している。また、諸外国からの保存修復の依頼が続いており、今後、倫理規程の有無が焦点となる可能性がある。

4）上記の状況を鑑み、保存修復専門家の倫理規程を制定し、クライアントの要請に応えるとともに、保存修復業に対する社会的評価の向上を図る必要がある。

5）上記の理由から、倫理規程の確立を急務と考え、ここに広く有志を募り、その設定に尽力することとした。またその際には、日本の文化、気候等の特殊性を考慮し、諸外国の事例に従うだけではなく、ある程度の独自性を持ったものにするべきである。願わくば様々な垣根を越えた意見を採り入れ、グローバルな見地に立ったものにするべく、広く各方面の参加を募り、制定に対して誠意努力する次第である。

の価値観として一般化し、この職業に対する信頼性を高めていくことが必要です。

今後ワーキンググループのメンバーを広く募り、ＮＰＯの中立性を生かして当機構独自の倫理綱領を示したいと思います。それと共に、各関係諸機関が倫理綱領策定の動きに向かってくださるならば、文化財の世界にとって非常に稔り多いことだと思います。

文化財保存支援機構の倫理綱領ワーキンググループに参加したい方、ご意見のございます方は、事務局までメールをお寄せください。メーリングリストなどを用いてディスカッションを重ねていきたいと思います。

→事務局メールアドレス：jimukyoku@jcpnpo.org

参考URL

※1　http://www.cac-accr.ca/ecode.pdf

※2　http://aic.stanford.edu/pubs/ethics.html

※3　http://icom.museum/ethics_rev_engl.html

東洋書画資料ワーキンググループ

田畔　徳一（ＮＰＯ文化財保存支援機構　評議員）

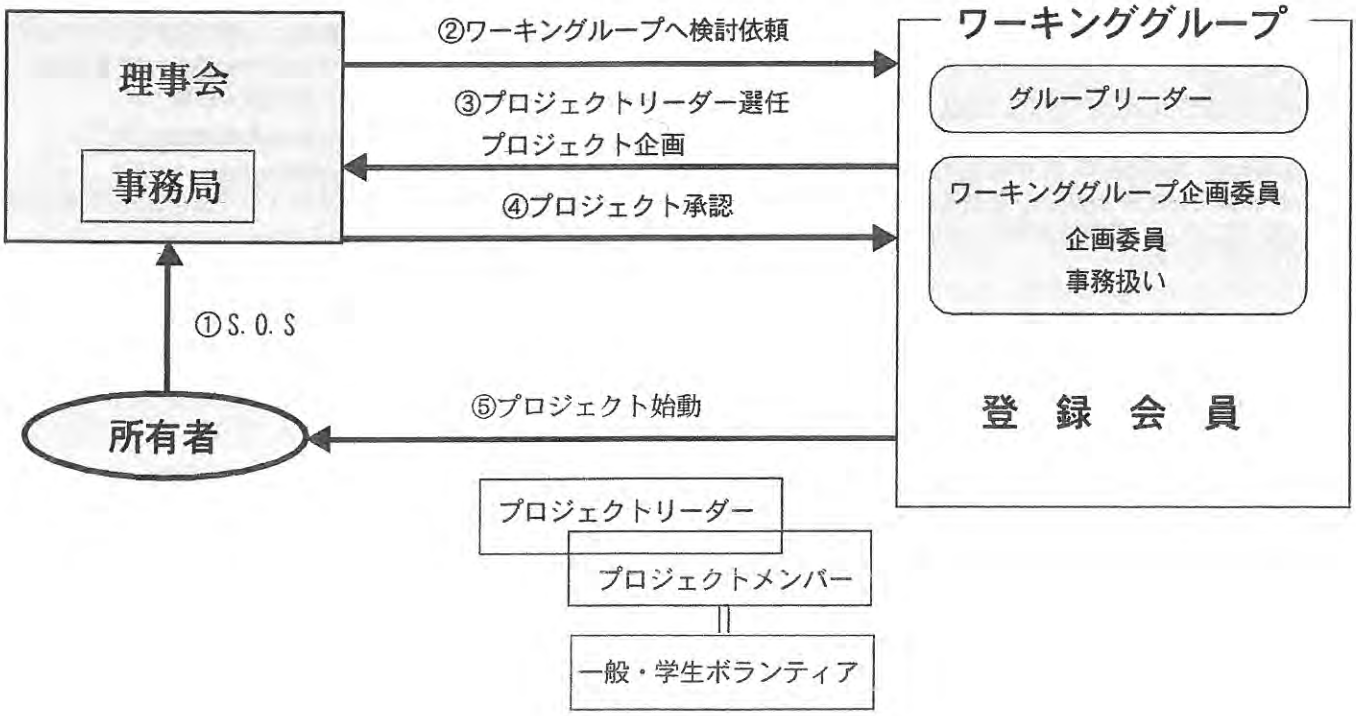
設立4年目を迎え、当機構にも様々な相談が寄せられるようになりました。当機構の特徴からか、やはり東洋書画や紙資料の相談が多く寄せられています。相談の中でも、公的機関や美術館、社寺など規模が大きい場合、調査の段階からかなり専門的な判断を伴います。

以上のことから、まずこの書画資料の分野でワーキンググループを設置し、運営会員あるいは評議員の中から責任者＝「ワーキンググループリーダー」を決め、その下に「企画委員」（事務扱い委員を含む）を置いて実際の調査や立案をする実行部隊とします。相談が寄せられた案件や、委員の企画は理事会で諮られ、プロジェクトとして決定されます。

次にワーキンググループでプロジェクトリーダーを選任、プロジェクトメンバーの人選（募集）、実際の進行計画、調整までを行う形を取ることにいたしました。（図参照）

この様な機会に人材養成の場として学生や技術者に参加してもらう機会を作ることも当機構の目的のひとつです。

今のところ「（東洋）書画資料」に関してのみのワーキンググループを計画していますが、その他の分野に関しても、会員の中で人材が充実してくれば段階的に形成していきたいと思います。「（東洋）書画資料」ワーキンググルーをモデルケースとして、他分野においても、段階的な整備を目指すことにご協力いただければと思います。



ＪＣＰからのお知らせ

平成16年度11月例会予定

「元興寺文化財研究所見学会」

■日時：11月8日（月）午前10時より午後4時まで

■会場：(財) 元興寺文化財研究所（〒630-8392 奈良市中院町11番地 TEL：0742-23-1376）及び 同研究所保存科学センター（〒630-0257 奈良県生駒市元町2丁目14-8 TEL：0743-74-6419）

■参加費：会員；3,000円　非会員；4,000円

■集合場所：近鉄奈良駅前 午前9：30集合。時間厳守。レンタカーで移動します。

■内容：元興寺文化財研究所は、人文科学分野の元興寺出土仏教民俗文化財の調査・研究に始まり、保存科学分野を加え、埋蔵文化財に文書、民具、建造物彩色資料を加え、保存処理・修復を手がけ、総合的な文化財研究所として活動しています。特に本部のある元興寺は、飛鳥時代、我が国初の堂塔伽藍を持った寺院”法興寺（飛鳥寺）に起源を発し、現在は世界文化遺産の一つに登録されています。本部では、主に文書類の修復に取り組み、生駒の保存科学センターでは考古遺物や民俗文化財、彩色資料などの保存処理・修復を実施しています。また、10月30日より秋期特別展『絵馬と色刷り版画でたどる彩色のうつろい』がなされています。今回は本部、保存科学センター、さらには秋期特別展の見学と交流を兼ねた企画にしたいと思っています。

※お申込み・お問合せはTEL/FAX: 03 - 5363-4533、あるいはE-mail： jimukyoku@jcpnpo.org まで。

①氏名 ②連絡先住所、電話番号 ③会員／非会員 ④参加人数をお知らせください。

※定員になり次第締め切らせて頂きます。

第12回和紙文化講演会

「東洋手漉き紙の伝統」－手漉き紙の多彩な展開－

■日時：平成16年11月27日 10:00～17:00

■会場：昭和女子大学グリーンホール（東急新玉川線三軒茶屋駅下車。南出口より徒歩5分。／JR渋谷バスターミナルより三軒茶屋方面行き 昭和女子大学前下車）

■内容：「東洋の紙用繊維と紙質特性」宍倉佐敏／「タイの手漉き紙」稲葉政満／「韓紙の製造」朴ヨンソン／「ブータン王国とウズベキスタン共和国の手漉き紙」久保田 彰／「澆紙法から流し漉きまで」久米康生　他DVDの上映あり

■参加費：3500円

■定員：250名

参加申込方法については、下記にお問い合わせください。

事務局：〒110-8714 台東区上野公園12-8

東京藝術大学 美術研究科 保存科学教室気付

第12回 和紙文化講演会事務局 稲葉政満

FAX：03-5685-7780 特設携帯電話：090-6562-8527（会期までの平日13:00～18:00）

※会場の昭和女子大学へのお問い合わせはご遠慮ください。

※締め切り；11月19日（金）

ご入会ありがとうございました。

（平成16年10月1日現在入会者数）

□理事　6名　　□運営会員　14名

□登録会員　130名　　□一般会員　111名

□賛助会員　20件

(株) 宇佐美松鶴堂
(株) 岡墨光堂
(株) 和蘭画房
(財) 元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学
　歴史遺産研究センター
(株) 光影堂
(有)坂田墨珠堂
(株) 修美
宗教法人　正法院
昭和不動産
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社美術品
事業部
(株) 半田九清堂
百元　節
フレンドトラベル
文化財保存
溝川商店
他個人3名
（アイウエオ順・敬称略）

NPO　ＪＣＰの活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
　文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
　登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
　この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
　この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
　・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL/FAX ： 03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www. jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。

・郵便振替　00120-4-10545　NPO JCP
・UFJ銀行　四ツ谷支店　普通預金　3960340

NPO JCP NEWS
第9号
2004年10月1日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒160-0008
新宿区三栄町6番地　小椋ビル403号
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）
増澤 文武
白井 久明
伊原 惠司
谷　久光（事務局長）
〈編集協力〉 嶋根 隆一
〈事務局〉 谷 久光（事務局長）・八木 三香（総務部長）
松本洋子・三浦功美子